

山中漆器

歴史

16世紀の後半にろくろ師が真砂[まなご]の村(現在の山中温泉上流)に移り住んだことが始まりとされている。後に、木地師たちは下流の山中温泉の地に定住するようになったが、当時は白木地のままの挽物で湯治客相手の土産物にすぎなかった。

江戸時代半ば(18世紀中頃)には、京都などから漆塗りの技法を学んで栗色塗が始まった。後に、朱溜塗と呼ばれ、山中漆器の特色となった。また、全国より塗師や蒔絵師を招き、髹漆[きゅうしつ]や蒔絵の技術を習得した。

江戸時代の末には、木地挽きの名手である蓑屋平兵衛が千筋挽などを考案し、明治の初期には、筑城良太郎が毛筋や稲穂筋などを創案して挽物の技が確立した。

特色

ろくろを使った挽物技術が特色である。木地の肌に極細の筋を入れる加飾挽きは、山中漆器が最も得意とするもので、その手法は千筋をはじめ糸目筋、ろくろ目筋、稲穂筋、平溝筋、柄筋、ピリ筋など数十種に及ぶ。この時使われる各種小刀やカンナはすべて木地師の自作であり、作業に応じて使われる。

筋挽きによって加飾されたものは、摺漆[ふきうるし]という木地に漆をしみ込ませて仕上げる方法により、木目をきわだたせ使い込むほどに味わい深いものにする。また、挽目をあらわした挽物の上に渦のような赤、黄、黒の漆で塗り分けた独楽塗りの技法も特色の一つである。

木地は堅く、狂いのないケヤキやトチ、水目桜を使い、縦木取りと呼ばれる独特の方法で、立木を自然な方向に木取りするため、歪みが生じにくく、堅牢である。

また、豪華な高蒔絵を施した茶道具、特に、棗[なつめ]の制作には定評がある。

挽物技術が平成22年4月2日、石川県無形文化財に指定された。



山中漆器



历史和特色

山中漆器の发祥要上溯至16世纪后期。传说有一位旋工匠移住到真砂村(现在的山中温泉)后,开始在当地传授旋床技术。后来,真砂村的木工们移住到山中温泉,向来访温泉的游客出售自制木制品并以此为生。当时只有本色木胎还没有施以涂漆技法。到了18世纪中期,从全国各地聘来有名的漆器师,引进了千筋旋涂、朱溜涂、独乐涂等各种漆法。一举将以往的土特产品转变为美术工艺品,山中漆器也由此而成为地区的一项产业。

山中漆器的特色是使用旋床技术制成的木胎。另一特色是“摺漆”漆法,它将美丽的木纹更加突出。

情報 资讯

主な生産地(主要产地)	加賀市(加賀市)
主な製品名(主要产品名)	飲食什器、茶道具(餐饮器具、茶具)
主な生産者(主要生产者)	山中漆器連合協同組合(山中漆器连合同组合) 〒922-0111 加賀市山中温泉塚谷町イ268-2(加賀市山中温泉冢谷町イ268-2) TEL (0761)78-0305 FAX (0761)78-5205 MAIL ylca@kaga-tv.com http://www.kaga-tv.com/yamanaka/